

指揮の危機

—ベネット少将と 1941・42 年マレー作戦における英国軍の有効性—

カール・ブリッジ

私は敵の最も弱いところ、また、地形が敵にとって最も不利なところに攻撃を加えるのであれば、どのような攻撃方法でも許可する

フリードリヒ大王「将軍たちへの指示」(1747 年)¹

オーストラリア人は英国の将官には容易に感銘を受けない

アール・ウェイヴェル陸軍元帥²

マレー半島を南下後、シンガポール島に上陸してから 7 日間におよぶ戦闘の末、1942 年 2 月 15 日、130,000 人の兵力を持つ英国軍は、固い決意を持ち、優れた将官に率いられた 60,000 人の日本軍に敗れ去った。それは、英国軍の歴史において、1781 年にアメリカ独立戦争でヨークタウンが陥落して以来、最大の降伏であった。そして、議論の余地はあるものの、シンガポールの陥落は、ヨークタウンに続き、大英帝国の第 2 の喪失が始まる兆しとなったのである。英国から見た場合、その敗退は、軍事的な指導力と効果が相対的に劣っていたことに、また、指揮官たちの能力を超えた要素に、どの程度、原因があるのだろうか。

シンガポールが陥落した理由は多数存在する。大戦略のレベルで、大英帝国は欧州における対独・伊戦に集中することを選択した。そして、極東では抑止に依存し、米国が参戦する可能性に期待したのである。それは、シンガポールの海軍基地に派遣された主力艦がわずか 2 隻—「プリンス・オブ・ウェールズ」と「レパルス」—であったことに表れている。その戦力は、日本軍の想定戦力の 7 分の 1 にすぎなかったのである。戦闘が開始された直後に、その 2 隻の主力艦は敵の航空攻撃によって沈没した。英国軍を支援する可能性のあったハワイの米国艦隊は、真珠湾攻撃で大打撃を受けていた。

マレーには旧式の航空機が 158 機、割り当てられていた。日本の進攻部隊は近代的な航空機を 617 機、擁していた（慌てた英国は新たに 157 機をつぎ込んだが、すでに手遅れであった）。英国軍には戦車がなかったが、日本軍には 80 両あった。また、英国軍には実戦の経験のない兵士が多く、一部は訓練も受けていなかった。英国軍はインド師団 2 個、インド旅団 2 個、現地人部隊から成る連隊数個（すべて英国軍正規将校の配下に

¹ Trevor Royle, ed., *A Dictionary of Military Quotations* (New York, 1989), pp. 23.

² A. P. Wavell, *Soldiers and Soldiering* (London 1953), pp. 30.

置かれていた)、オーストラリア師団 1 個、そして英国師団 1 個で構成されていた³。一方、日本軍は中国戦線から送られてきた百戦錬磨の師団 2 個とエリート集団である近衛師団で構成されていた。つまり、日本軍は訓練の行き届いたバランスの良い部隊であったが、英国軍はそうではなかったのである。

事実上、英国は戦闘開始直後に制海権を、そして間もなく、制空権も失った。しかし、民間人がパニックに陥らないよう、英国軍は新たな防衛線を構築しつつ、最後まで抵抗した。英国は戦争継続のために不可欠なゴムの生産を維持することの方がより重要であると考えていた⁴。日本軍の司令官で、空地協同の専門家であった山下奉文中将の迅速な「銀輪電撃戦」⁵は航空機による上空からの支援を得て、また、陸上および海上からの側面攻撃とあいまって、同じく中将であったアーサー・E・パーシバルが率いる英国軍を絶えず出し抜いた。その戦いは、状況を安定させるために十分な増援を確保しようとする英国軍と、そうはさせまいとして急速に前進をはかる日本軍とのレースになったが、日本軍のスピードが勝る結果となった。

上記のような状況下ではあったものの、パーシバルがより良い手を打ち、より良い結果を得る可能性はなかったのであろうか。第 8 オーストラリア師団長 H・ゴードン・ベネット少将は、その可能性は確かにあったと考えていた。その行動に関しては議論のあるところだが、ベネットは陥落の際にその地位を放棄してオーストラリアに逃れた。オーストラリアが侵略される前に、自分が日本軍との戦闘から学んだ教訓を自国民に伝えるためであった⁶。

I

1941 年、ベネットはオーストラリアでの市民兵では最先任であった。オーストラリア植民地軍には彼より階級が上の軍人が 5、6 人いたが、すべて職業軍人であった。1915 年、ベネットは若き将校としてダーダネルスの戦いに参加した。その後、西部戦線に移った彼は、1916 年末には大英帝国軍で最も若い准将（29 歳）になったのである。ベネットにとってのヒーローであり、お手本にもしていたのは、市民兵でありながらオーストラリアの最高司令官となったジョン・モナッシュ將軍である。モナッシュはヒンデン

³ S. Woodburn Kirby, *The War Against Japan, Vol.1: The Loss of Singapore* (London, 1957). これは権威のある文献である。最近の文献では、Malcolm H. Murfett et al., *Between Two Oceans: A Military History of Singapore* (Singapore, 1999) 所収の Brian P. Farrell による第 8 章、および、Alan Warren, *Singapore 1942: Britain's Greatest Defeat* (London, 2002) がある。数字は、I. C. B. Dear, ed., *The Oxford Companion to the Second World War* (Oxford, 1995) から引用。

⁴ 簡単に地政学的分析については、拙稿 “The Malayan Campaign, 1941-2,” in *International perspective* vol. XIX, Special Issue, 1996, pp. 169-82.

⁵ H. Gordon Bennett, 'Introduction' to Masonobu Tsuji, *Singapore: The Japanese Version* (London, 1966), p. 7. 実際には、山下の部隊は自転車だけでなく、トラックも利用していた。

⁶ 最終的に、H. Gordon Bennett, *Why Singapore Fell* (Sidney, 1944)として出版された。

ブルグ線を突破するなど、1918年に連合国の勝利をもたらした前線部隊で極めて重要な役割を負ったオーストラリア植民地軍を率いていたのである。ベネットはいたって勇敢で、効率を重視し、いかなる犠牲を払っても攻撃することを望んだ。彼は会計士として市民生活を営んでいたが、オーストラリア人であれイギリス人であれ、形式主義的で慎重な正規参謀将校たちを軽蔑し、素人の突撃を信奉していた。ベネットは赤毛で痩躯、身長は普通で、気が短く、傲慢でづけづけ物を言う人物であった。そして、「短気は上級将校に与えられた特権」だが、彼の短気は常軌を逸していた⁷。ベネットは政府や軍の指導者たちに、絶えず「お分かりにはならないでしょうが、自分は新しい戦争において最高指導者となるべき人物です」という趣旨の発言をしていた⁸。1940年9月、ベネットは第8師団の指揮を任され、翌年2月にマレーに進軍した。

マレーにおけるベネットの上官はパーシバルであった⁹。ベネットもパーシバルも53歳であった。パーシバルは正規の軍人で、ベネットとほぼ同じスピードで、1918年には旅団長にまで昇格していた。両大戦間、パーシバルは主にあちこちの参謀職に就いていた。1936年から翌年にかけて、パーシバルはマレー司令部で大佐の地位にあり、英国の最新の防衛計画を作成した。その計画は防空を中心とする計画であり、陸軍がマレー半島各地の飛行場、特にタイとの国境に近いコタバルとアロール・スターの飛行場の防衛に当たるというものであった。パーシバルは、第二次世界大戦の緒戦では本土防衛を担当する師団を指揮していたが、1941年5月に、マレー軍司令官に任命された。彼の直属の上司は、極東軍司令官ロバート・ブルック＝ポップム空軍大将であった。

パーシバルはどのような人物であったのだろうか。あるジャーナリストはパーシバルを「痩せていて背が高く、最も目立つ特徴は、突き出た2本のウサギのような歯である」と描いている。ポップムの後継者ヘンリー・ポウノール中将は、パーシバルは「知識はあるが、厳しい戦闘を戦い抜く強さは持っておらず、退屈で陰気な指導者である」と見ていた¹⁰。事実、パーシバルは兵士たちの強い指導者というよりも、慎重で外交的、そして学問を好む指導者であった。ベネットは1944年に出版した本の中で、具体的な名前は記さずに、パーシバルのようなタイプの人間を次のように罵倒している。

戦争において、良い兵士は身体的に攻撃的でなくてはならない。そして、良い指揮官は精神的に攻撃的でなくてはならない……。だが、平時には、……温和で慇懃な「イエスマン」が受け入れられて昇級し、ポストを与えられる。我が国の幕僚養成大学は何となく銜学的になってしまっている。「psc」（幕僚養成大学修了）という折紙は、戦

⁷ 作者不明、Wavell, *Soldiers*, p. 32.

⁸ 最良の伝記は、A. B. Lodge, *The Fall of General Bennett* (Sydney, 1986).

⁹ John Keegan, ed., *Churchill's Generals* (London, 1991) 所収の John Simpson “Percival” および、Clifford Kinvig, *Scapegoat: General Percival of Singapore* (London, 1996) を参照。

¹⁰ Simpson, “Percival”, pp. 267, 269.

士ではなく思想家を生み出してしまった。

その結果、英国陸軍の上級将校たちには見映えの良い参謀将校があまりにも多く、攻撃的な戦士があまりにも少なくなったのである¹¹。

ベネットは次頁に、パーシバルは「精力的ではなく、知的であった」と記している¹²。ベネットの個人的な日記には、より直接的な言葉が連ねられていた。「彼は強くは見えない。むしろ、イエスマン・タイプだ。聞く耳は十分に持っているが、ほとんど何も言わない……。頭はいいが、弱くて煮え切らない。」無遠慮で非外交的な態度が本来の性格であるベネットは、1941年8月の記者会見の席上、つい口を滑らせてしまった。パーシバルを「利口だが弱い」と評してしまったのである¹³。

ベネットはパーシバルの部下である軍団や師団の指揮官たちのこともあまり評価していなかった。ベネットは作戦開始後、オーストラリアの陸軍大臣に書簡を送り、次のように述べた。「この司令部の上級将校たちは、その任務に適した人物ではないという印象を受けています。」彼らには「攻撃的な精神」が欠けており、「引きこもり」とでも呼ぶべき状態に陥っている。ベネットは特に第3インド軍団長ルイス・「ピギー」・ヒース中将に批判的であった。ヒースはインドの前線とアビシニア（エチオピアの旧名）で輝かしい戦歴を残していたが、マレー北部での退却作戦に固執していた。ベネットは次のように書いている。「退却について率直に話し合い、攻撃することを要請した……。だが、ヒースは反対した……。非常に消極的な態度だ……。私は面食らった……。会議後、パーシバルと腹藏なく話し合い、戦争に負けるより、ヒースを失ったほうがましだと告げた。」ベネットはまた、次のようにも書いている。ヒースの「性格はパーシバルの性格より強く、総じて、ヒースは自分の意思を何とか押し通した。」¹⁴ 終戦後、パーシバルはヒースに対する信頼を徐々に失っていたことを認めた。「この半島の端に至るまで、どの地点をどれだけの期間、保持するべきかについて明確な指示を出さなければ、それらの地点は永久に放棄されてしまうのではないかと不安に襲われた」とパーシバルは記している¹⁵。作戦中、ヒースとパーシバルは戦略について対立を繰り返していた。しかし、ヒースを解任する勇気をパーシバルは持ち合わせていなかった。

下級将校と末端やそれに近い部隊の質もまったく褒められた状態ではなかった。ベネットは極めて多くの「(英国人とインド人の)部隊指揮官たちは攻撃精神に欠けており」、

¹¹ Bennett, *Why Singapore Fell*, pp. 19-20.

¹² Ibid., p.21.

¹³ Lodge, *The Fall of General Bennett*, pp. 48-49.

¹⁴ Bennett, *Why Singapore Fell*, Chapter V, especially pp. 22, 50, 75, 82. および、Lodge, *The Fall of General Bennett*, pp. 74, 78. ベネットは、特に、マレーの首都であるクアラルンプールを戦いもしないで諦める決定を行ったヒースとパーシバルに批判的であった。同様に、ベネットは、後に、クアンタン飛行場の明け渡しについても批判した。

¹⁵ Simpson, "Percival," p. 266.

「『ほとんど病氣』の状態」にあったと見ていた。彼らはすぐに「疲れて弱く」なり、「決意と戦闘意欲を失った。」だが、英印軍将校の中には、勇敢で部下たちに手本を示す者も一部にいたことはベネットも認めている¹⁶。部隊に後から入ってきた兵士たちの中には、「兵士としての訓練を部分的にしか受けていない者や、ジャングルでの戦闘の経験が浅い者」もいたので、「経験豊かで戦勝気分満ちている日本軍とのジャングル戦に投入するのは無謀であった¹⁷。」パーシバルは後に、兵士たちを思いやって次のように書いている。「素材（兵士たち）が悪かったわけではない。それが単に素材のままであったというだけである。」ベネットは個人的な手紙の中で、兵士たちは「女学生のように逃げ回った」と書いている¹⁸。また、オーストラリア兵にしても大差はなかった。後に増強された部隊の中には、小銃を撃ったことがない者や、刑務所に入っていた人間のくずも含まれていたのである¹⁹。しかしながら、第8師団の兵士たちの大半は、アーガイル・アンド・サザランド高地連隊などの英国軍正規兵、インド人部隊やマレー人部隊の兵士の一部と同様に、良く訓練されていた。部隊やその訓練、兵士の数や装備などに大きな問題があったわけではなく、むしろ、指揮官たちがそれらをどのように運用したか、また、空や海からどのような支援を受けたかが問題であったのである。

II

パーシバルの戦略には欠点があった。1936年から翌年にかけて作成したものの一案であったその計画は、北部の飛行場を防衛すると同時に、西海岸から少し内陸寄りを走っている主要な鉄道と道路を横切る形で各部隊を配置するよう求めていた。それらの任務は、西海岸の第3インド軍団、および、北部のコタバルの東海岸とクァンタンの中部海岸に展開する2個のインド分遣旅団に割り当てられた。また、シンガポール島とその基地にとって重要な後背地である南部のジョホールの防衛は、第8オーストラリア師団に任された。そして、シンガポール島自体の防衛は、英国軍正規兵とマレー人義勇兵に託された。その布陣はあらゆる緊急事態を対象としていたが、結果的にパーシバルの軍隊を広く分散させ、細部において弱体化させることになった。飛行場の防衛は誤った決定であった。十分な数、あるいは十分な質の航空機が使用できない中で、なぜ飛行場を防衛する必要があったのであろうか。確かに、進撃してくる敵軍部隊の多くを空から叩くという計画などほとんど役に立たなかった。飛行場の一部を破壊し、飛行場の防衛部隊

¹⁶ Bennett, *Why Singapore Fell*, p. 126.

¹⁷ Ibid., pp. 21, 23, 46, 157, 223.

¹⁸ Lodge, *The Fall of General Bennett*, pp. 110, 119.

¹⁹ Bennett, *Why Singapore Fell*, pp. 146, 154, 179, 213.

と航空機に他の任務を割り当てた方が良かったかもしれない²⁰。

パーシバルは作戦を実行する上でも弱さを持っていた。日本軍がタイとの国境付近のシンゴラとパタニから上陸してくることは予想されていた。タイに強力な縦隊を送り込み、レッジ (the Ledge) と呼ばれる悪路の峠の部分で先制攻撃を加えることが計画された。レッジを破壊すれば、日本軍の進行は著しく阻まれる。しかし、パーシバルはその日の早朝に直ちに判断を下さずにポッパムに相談したため、半日が失われてしまった。それは、日本軍がレッジに到達するには十分な時間であったのである²¹。山下の主力部隊が西海岸を南下しようとしていることが明らかになっても、パーシバルは過度の用心深さを捨てなかった。パーシバルは山下の進撃を食い止めるために部隊を集結させるのではなく、東海岸にも同様の事態が発生した場合に備えて、手持ちの部隊を均等に分散させることを選択した。それは彼にとっては許されない贅沢であり、スリム・リバーにおける戦いの敗北、そして後にはジョホール線の喪失の主たる原因となった。実際、東部の道路網は貧弱で、ジャングルは深かったので、西海岸に比べて、東部の海岸線に沿って進むには多くの時間を必要としたはずである。パーシバルは重要な地点に戦力を移動させることをしなかったので、規模で劣る山下の軍隊は局所的な優勢を確立する機会を得た。そして、山下はその機会を活かしたのである²²。洞察力のある論者は、山下は碁を打っていたのであり、地域的な支配権を握り、急襲して敵を囲い込むことに集中したと論じている。一方、パーシバルはチェスに興じていた。慎重に考え、敵のコマを盤上から排除し、自分のコマが置かれている枰目を相手に与えないようにしようとしていたのである²³。

北部防衛に失敗したもうひとつの要因は、特別の任務を与えられた第8オーストラリア師団を分散させないとの固い決意をベネットが持っていたことであるが、この事実が言及されることは滅多にない。敵の攻撃が開始されるかなり前に、ベネットはパーシバルと交渉し、オーストラリア師団がジョホールの防衛を担当することを認めさせていた。その結果、パーシバルはオーストラリア師団を分散してその一部を北部防衛の増強に充てることに消極的になった。後にオーストラリア部隊がゲマスで行ったような戦闘をマレー作戦の早い時点で（例えば、スリム・リバーにおける戦いで）行っていたら、日本軍の進撃は大幅に遅れ、パーシバルが是が非でも必要としていた増援部隊を呼び寄せることができたであろう。ベネットの鋭敏さ、自負心、そして国を誇りに思う気持が、パーシバルによるオーストラリア植民地軍の最良の活用を妨げたのである。パーシバルが

²⁰ Chit Chung Ong, *Operation Matador: Britain's War Plan Against the Japanese* (Singapore, 1997) がうまく論じている。

²¹ Bennett, *Why Singapore Fell*, pp. 62-63.

²² Farrell, Chapter 8 in Murfett et al., *Between Two Ocean*, pp. 206-207; Simpson, "Percival," p. 266.

²³ Janet Uhr, *Against the Sun: The AIF in Malaya, 1941-42* (Sydney, 1998), p. 58.

より強い指揮官であったならば、気分屋で気難しいこのオーストラリア人に対しても、自分のやり方を押し通していたであろう²⁴。

日本軍の基本的な戦術は電撃戦の変形であった。山下は英国軍の位置を詳細に調べ、火砲、迫撃砲、攻撃用航空機を備えた主力部隊の場所を特定した後、敵の側面に回り込む部隊を多数送り込もうとした。そうした部隊のひとつが英国側の防衛線に何とか近づくか、あるいは後方に回り込めば、英国軍には退却以外の選択肢はほとんどなくなることになる（その防衛線が幹線道路のひとつであった場合は、特にそうである）²⁵。戦闘開始直後に制海権を握った山下は、海岸に沿って蛙跳びのように複数の部隊を交互に前進させる能力を持っていた。彼は、まず、それを実行した。そして、その作戦が最も顕著に行われたのがテロク・アンソンである。山下は敵の後方に回り込むという大規模な掃討作戦を実施した。そして、その直接的な結果として、スリム・リバーでの戦いではヒースの軍団が慌てふためいて退却するという戦果を得たのである²⁶。山下はこの策を再三再四、用いた。「プリンス・オブ・ウェールズ」と「レパルス」、そして、その上空掩護が無傷であったなら、山下がそうした選択肢を持つことはなかったであろう。

III

ベネットは 1944 年に出版した弁明書で、第一原理の中から日本軍の戦術に対抗する手法を考案したと主張している。

マレー作戦を通して、我が（英国）軍の指導者たちは、その戦法に対する答えを探していた。しかし、オーストラリア人が日本軍の戦術に打勝つ優れた方法を発見したのである。後にその方法はニューギニアで試され、成功した²⁷。

ベネットは別の箇所でもその方法について説明している。

視界も兵器も限られたジャングルの中で、動かずに防衛態勢を維持するのは容易ではない。攻撃側は防御側の側面に回る経路を即座に発見することができる。防衛部隊からわずか数百ヤードの場所を回り込むように進んでいくのである。日本軍はそのような行動を取った。それに対する唯一の答えは攻撃であった。陣地の側面を対象とした本格的な戦闘斥候を派していたら、回り込もうとする敵部隊の前進を阻止することが

²⁴ Lodge, *The Fall of General Bennett*, pp. 45-49 and *passim*.

²⁵ Bennett, *Why Singapore Fell*, pp. 43, 225.

²⁶ Farrell, Chapter 8, pp. 204-205.

²⁷ Bennett, *Why Singapore Fell*, pp. 225-226.

できたであろう。そして、大胆な反撃による支援があれば、敵部隊を殲滅できたかもしれないのであろう²⁸。

ベネットは上記の弁明書の中で、ゲリラ戦、機動力のある予備軍、そして、わずかな領土を守るのではなく、敵とその物資をあたりかまわず積極的に探索・破壊する活動を激賞している。

しかし、その戦法の重要な要素は、北部で2個大隊一力強い指揮官であるI・M・スチュアートに率いられたアーガイル・アンド・サザランド高地連隊所属一が戦闘の最初の数週間にすでに開発していたことについては、ベネットの本の中では触れられていなかった。スチュアートの戦術は「道なき道」を戦いながら進み、遭遇戦において高度の機動性を備えた歩兵が敵を激しく叩くというものであった。その戦術はベネットが考案した同種の戦術よりかなり前に生み出されていたばかりでなく、ベネットの戦術に比べて開発の程度が高度であった²⁹。ベネットの本には、シンガポールが陥落する前にスチュアートは同島を脱出してオーストラリアに渡り、オーストラリアの人々に彼の戦法を伝えたことも言及されていなかった。したがって、オーストラリアが後にパプア・ニューギニアでジャングル戦の手法を用いて戦術的な成功を収めることにつながる種を蒔いたのは、同国人のベネットではなく、スチュアートであったのである³⁰。

しかし、我々の視点から見て、また、特に同僚に対する辛辣な批判を考えると、いっそう興味深いのは、ベネット自身がマレーにおいてジャングル戦の指揮官としていかに有能であるかを証明したことである。その評価を行うには、1942年1月中旬にムアールとジョホール線の（実際には、線というより地域であった）ゲマスでの作戦、および、2月初旬のシンガポール島をめぐる戦いにおいて重要となった北西地区の防衛を調べる必要がある。

IV

1月初旬、アーチボルド・ウェイヴェル大將は、新たに創設されたABDA³¹エリア（マレーが含まれていた）の総司令官として戦域に到着した。ウェイヴェルは直ちにパーシバルの意見を退けて、ジョホール線の重要な西半分の防衛の指揮を、ヒースではな

²⁸ Ibid., p. 47.

²⁹ I. M. Stewart, *History of the Argyll and Sutherland Highlanders 2nd Battalion: The Malayan Campaign 1941-42* (London, 1947). 他の観点から見る場合は、Uhr, *Against the Sun*, pp. 51-53 を参照。

³⁰ John Moremon, "Most Deadly Jungle Fighters? The Australian Infantry in Malaya and Papua, 1941-3" BA Hons thesis, History Department, University of New England, Armidale, N.S.W. Australia, 1991. また、Lodge, *The Fall of General Bennett*, pp. 191, 213-215.

³¹ つまり、米国、英国、オランダ、オーストラリア。

く、より攻撃的なベネットに任せた。ベネットの西部部隊は、彼自身の第 27 オーストラリア旅団、第 9 インド師団から派遣された 2 個旅団、そして、到着したばかりで不慣れな第 45 インド旅団で構成されていた。ベネットは幹線道路のゲマス＝セガマット間に敵を釘付けにすることを念頭に置いた防衛態勢の構築に直ちに着手した。彼は側面である海岸線を防衛するために、第 45 旅団を牽制部隊としてムアールのフェリー乗場と海岸道路から、ムアール川を 23 マイル遡った地点に至るまで、点々と分散して配置した。主力部隊はゲマスとセガマットに置き、前線にはオーストラリア部隊、そこからさらに南には第 9 師団を配置した。ベネットの計画の主要な要素は、大隊規模の大掛かりな待伏せであった。幹線道路が狭くなっているゲマス付近のグメンチェ川に架かる橋が待伏せの場所として設定された。ベネットは強力なカウンターパンチを浴びせる計画を立てていた。彼は日本軍は強力な部隊を海岸線に沿ってムアールまで送り込むようなことはしないと読み、賭けに出たのである³²。

ゲマスでの待伏せは大成功を収めた。自転車に乗ったおよそ 700 人から 800 人の日本兵が、殺戮可能な場所で捕捉されたのである。日本兵の半分が戦死し、多くが負傷した。オーストラリアの官選歴史家の言葉を借りれば、それは次のような光景であった。

（橋の下）爆薬が激しく爆発し、木材、自転車、そして人間の体を空に吹き飛ばした。それとほぼ同時に、ダフィー（大尉）が指揮する 3 個小隊が敵に手榴弾を投げ付けるとともに、ブレン銃、トムソン式小型機関銃、そして小銃を敵に向けて掃射した。その音はあまりに大きく、ダフィーが砲兵隊の発砲を命じたとき、前線にいた観測将校は自分の配下の砲列がすでに発砲していると勘違いしたほどである³³。

しかし、ベネットはその待伏せ作戦の成功から永続的な恩恵に浴さないうちに、ムアールで厳しい試練を受けることになった。彼はムアール川に沿って広がったインド大隊に対して、2 個中隊を川の北岸に陣取るよう命じた。それにより、すでに危険なほど薄くなっていた援護態勢がより薄くなった。さらに悪いことに、彼は旅団全体に対して 1 個の砲兵中隊しか割り当てなかったのである。ベネットはゲマスを強化するために、故意にムアールの戦力を削減したのである。それは山下をあまりにも過小評価する行為であった。山下はムアール川を渡ると同時に別の部隊をさらに南に上陸させ、テロク・アンソンで成功した作戦を繰り返した。ベネットは計画していたカウンターパンチを浴びせるどころか、第 45 旅団が崩壊したために、側面を強化せざるを得なくなった（ベネットは、第 22 オーストラリア旅団を東海岸から呼び寄せて側面強化に当たらせるよう

³² Lodge, *The Fall of General Bennett*, pp. 84-87.

³³ L. Wigmore, *The Japanese Thrust* (Canberra, 1957), p. 214.

要請し、ウェイヴェルもそれに同意していたが、パーシバルがその決定を覆した。それが、おそらく重大な結果をもたらしたと思われる³⁴。最終的に、ベネットは配下のオーストラリア部隊（1 個大隊）をその任に当たさせたが、その部隊は大敗を喫した。それにさらなる失望が重なった。ベネットの部隊後方のバトゥ・パハに陣取っていた英国軍第 53 旅団が、最初の交戦で崩壊したのである。ベネットはバクリでの 2 日間の激しい戦闘をはじめとする勇敢な引延ばし作戦を遂行したが、ヒースと同じように、結局は退却を余儀なくされた。試練に遭遇したときのベネットの行動は、彼が批判していた将官たちの行動と大差なかったのである³⁵。ベネットの誤った作戦計画の結果は重大であった。ジョホール線が破られ、マレー半島の戦いで敗北が決まった。

因みに、ゲマスの待伏せは、ジョホールの戦いにおける唯一の待伏せではなかった。オーストラリア植民地軍第 29 連隊第 2 大隊は西海岸のバクリで、第 22 インド旅団はラビスで、そして、オーストラリア植民地軍第 18 連隊第 2 大隊は東海岸のメルシン付近のニススデールで、同じような待伏せを行った。それらの作戦は功を奏したが、ときすでに遅く、山下の進撃の勢いを大幅に削ぐことはできなかった。

V

ベネットの次の、そして最後の試練—シンガポール島での戦い—における彼の作戦計画と決定も同様に問題があった。その戦いにおいても、パーシバルは彼を支援しなかった。パーシバルがマレー半島のすべてを防衛すること—その結果、十分に防衛できたものは何もなかった—を選択したように、ベネットもシンガポール島のすべてを防衛しようとした。ウェイヴェルもベネットも、山下の主力部隊の進撃路はジョホール提道の北西側であると考えていたが、パーシバルは北東から襲来する可能性もあると考え、双方の場合に対処できるよう部隊を並置した。パーシバルはまた、唯一の予備旅団を北西側に投入するのをためらっていたが、ようやく決断したときにはもはや手遅れであった。

「私は英国での演習から教訓を学んでいた。主攻に対処しているという確信を得るまでは、予備部隊を投入してはならないという教訓である」と後年、パーシバルは述懐している³⁶。しかし、彼にとって不幸であったのは、陽動作戦であると思った北西での行動が本格的な進攻であったことである。パーシバルの判断の誤りは、ベネットにも極めて不幸な結果をもたらした。

しかし、ここではまず最初に、固定防衛について説明しよう。ウィンストン・チャーチルは、当時、パーシバルが海岸に障害物を設置したり、ジョホール水道を見下ろすシ

³⁴ Uhr, *Against the Sun*, pp. 76-77.

³⁵ Lodge, *The Fall of General Bennett* の第 5 章は、最良の分析である。

³⁶ A. E. Percival, *The War in Malaya* (London, 1949), p. 272.

ンガポール島の陸地に沿ってあらゆる種類の固定防御設備を構築したりするのをおろそかにしたことを耳にして恐怖に駆られた。さらに驚くべきことに、パーシバルは状況を改善するために工兵隊長が作成した時宜を得た計画をも拒否したのである。そのような防御は「兵士と住民の士気に悪い影響を与える」というのが、パーシバルの拒否の根拠であった（ベネットもまた、理由は異なるが、同じ工兵隊長が提案した戦車を障害物とする計画の採用を拒否していた。ベネットは「対戦車兵器を持った砲手が戦車を停止させて破壊すればよい」と述べたのである）。心理学者のノーマン・ディクソンは、パーシバルとベネットの判断について、「彼らにとって防御を行うことは、自分たちが置かれている危険な状況を認めることを意味する。」そして、それを容認するのは、彼らが受けた軍事教練においては忌まわしいこととされていたのであると分析している³⁷。

さて、ここでベネットの指揮に関する決定の分析に戻ろう。ベネットはシンガポール島の北西部にオーストラリア植民地軍の2個旅団を展開し、ジョホール水道に臨むマングローブの湿地とジャングルに覆われた岬の防衛に当たった。皮肉なことに、その2個旅団はこの作戦で初めて一緒に行動することになったのである。彼は第44インド旅団と配下のマレー旅団をオーストラリア部隊の後方に置いた。彼はその比較的貧弱な戦力で、およそ30マイルにおよぶ海岸線を防衛しなければならなかった。言うまでもないが、彼の作戦計画には大きな穴があった。そして、その穴から敵は侵入することができたのである。敵が選択した10マイルの前線でベネットの部隊に対抗したのは、日本軍の2個師団であった。それに先立つ空爆によってベネットの移動司令部の一部が破壊され、記録文書の一部が失われた。ベネットは楽天的に、「いずれにしても、今次戦争で事態の改善には役立つ文書はほとんどないであろう」と書いた³⁸。

夜間に日本軍が上陸している間、通信は混乱状態にあった。電話線は爆撃で切断され、火砲は十分な調整が行われず、上空掩護はまばらで信頼できなかった。ベネット麾下の旅団長たちは疲れ、混乱し、重大な過ちを犯した。夜明けに前進するよう命じられたテイラー准将は、実際には反対の行動を取った。侵入してくる敵の部隊によって分断されそうになっていると考えたからである。その結果、テンガ飛行場付近で防衛線に穴が開き、飛行場が奪われた。そのような状況では、テイラーの混乱に気付いていたベネットが、おそらく前線に赴いて現状を自分自身の目で確かめるべきであった。また、ゲマスでの待伏せを担当したマックスウェル准将は、さらに大きな誤りを犯した。マックスウェルは内側に最終的な外辺部を形成せよというパーシバルの命令を誤って解釈した。その命令はベネットによって言い換えられ、消化不良の状態でもマックスウェルに下達され

³⁷ Norman F. Dixon, *On the Psychology of Military Incompetence* (London, 1976), pp. 138-140. 同種の理由により、オーストラリア部隊は、数日間、日本軍が展望所として使用していることが明らかであったにもかかわらず、水道対岸にあるジョホール宮殿のスルタン塔に発砲することが禁じられていた。

³⁸ Bennett, *Why Singapore Fell*, p. 173.

たのである。その直接的な結果として、マックスウェルはある地点まで退却したが、それによって、極めて重要なブキテマ高地—シンガポール島の 2 個の水源地が位置していた地点—に続く道ががら空きになったのである。さらに、マックスウェルの退却はより大規模な退却の引金になり、克蘭ジ=ジュロン線全体が失われた。ベネットは自著の中でマックスウェルの失態を非難しているが、それは実際にはパーシバルの命令をあまりにも早く、また、あまりにも不用意に伝えたベネットの過ちであった³⁹。

それはベネットにとって最悪の時期であった。パーシバルは次のようなコメントを残している。「ゴードン・ベネットは国にいたときの自信をまったく失っていた。彼は常にオーストラリア部隊は日本軍の侵入を阻止できると確信していたが、実際に防衛線が突破されると狼狽した。」⁴⁰ この段階で、ベネットは事実上、戦闘に興味を失っていたようである。あるときベネットは 3 段階の反攻計画を決定するよう参謀から要請された。彼はろくに考えもせず、即座に、鉛筆で地図の上に 3 本の線を引いた。しかし、ベネットが引いた最初の線の一部は、明らかに敵の支配地域の中に入っていたのである⁴¹。ベネットはシンガポール島に退却する前の段階ですでに敗北を予想し、降伏時にオーストラリアに逃れることを考えていた。

ベネットと 2 人の参謀は、降伏文書が効力を発するやシンガポールから逃れた。しかし、オーストラリアに到着したベネットは、戦線離脱を非難された。彼は正式に罰せられることはなく、軍隊でさらに上級の地位を与えられたが、実際の戦闘で再び部隊を指揮することはなかった⁴²。ベネットは自分のヒーローであるモナッシュと戦闘で肩を並べることができなかった。さらに、逃亡の決定によって示された途方もない政治的判断力の欠如は、ヒーローが決して認めない要素であった。最後の数週間、ベネットの頭は部隊を指揮することではなく、逃亡することで一杯であったのではないかという強い疑念を振り払うことはできない。

議論の余地はあるが、ジョホール飛行場が失われたるや、シンガポール島の防衛は「万事休す」の状態になったと思われる。しかし、これも議論の余地のあるところであるが、十分な増援部隊が到着するまで、島を持ちこたえることができた可能性もある。戦闘で鍛えられたオーストラリア植民地軍の 2 個師団が中東から、そして、英国軍の 1 個装甲師団が英国本土から、スマトラを目指してインド洋を全速力で進んでおり、2 月末にはシンガポールに到着する予定であったのである。そうした状況を考えると、ジョホールとシンガポール島におけるベネットとパーシバルの過ちが、この作戦の運命を最終的に

³⁹ Ibid., Chapter 22, especially pp. 175-176, Lodge, *The Fall of General Bennett*, Chapter 7, and Farrell, Chapter 8, pp. 227-232.

⁴⁰ Percival, *The War in Malaya*, p. 275.

⁴¹ Lodge, *The Fall of General Bennett*, p. 154.

⁴² Ibid., Chapters 10-13; Mark Clisby, *Guilty or Innocent? The Gordon Bennett Case* (Sidney, 1992).

決定付けたと言えよう。

VI

フリードリッヒ大王の座右の銘―最良の将軍は敵の最も弱いところ、そして、地形が敵にとって最も不利なところを攻撃する―は、単純だが人を惑わす格言である。敵の重心 (*schwerpunkt*) を発見するには、地形や敵の展開状況と能力を読み、敵の心の中を見透すだけでなく、自分自身とその部隊の能力も理解しなければならない。兵站の鉄則を限界まで推し進めるのは可能だが、その限界を超えると、必ずしっぺ返しを喰う。第二次世界大戦のような全面戦争では、空と海から支援を得ると同時に、それらを最大限に活用することが極めて重要であった。マレー作戦におけるパーシバルは、ある学者の言葉を借りれば、「手持ちの札が悪く、(それを) 下手に使った」のである⁴³。彼は隷下部隊を集中させず、あらゆる場所で強い部隊であろうとした。しかし、その結果、どこにおいても部隊は強くなかったのである。彼はこのパターンを半島全体で繰り返した。そして、山下は前線突破に必要な局地的な優勢を何度も、しかも容易に獲得することができた。弱腰のパーシバルはヒースの言う「引きこもり」を抑制することも、ベネットを服従させて北部防衛のためにオーストラリア植民地軍の1個旅団を派遣させることもできなかった。ベネットは日本軍の戦法に対処する戦術を見出していたが、その戦術を一貫して実施する能力は持ち合わせていなかった。彼は自分が批判していた指揮官たちと同じ間違いをたびたび犯したのである。

しかし、軍事的な有効性は相対的な問題である。山下とその第25軍は厳しい訓練を積み、適切な装備を有し、適確で柔軟かつ効果的な戦術を駆使し、見事な作戦を遂行した。パーシバル、ヒース、ベネットがそれぞれの役割を完璧に果たしたとしても、最終結果を覆すのに十分な時間を稼ぐことが可能であったかどうかは依然として大いに疑問である。海上兵力と航空兵力のバランスが有利に働いたとき、そして、敵の増援部隊が到着する前に、絶好の好機が山下に訪れたのである。そして、彼はそれを最大限に活用した⁴⁴。当時、マレーのあの状況下で、大英帝国の将軍たちとその部隊は、そのような好機には決して恵まれなかった。

⁴³ Farrell, Chapter 8, p. 218.

⁴⁴ 補給の状況とその他のあり得た結末に関する議論については、拙稿 “Churchill, Australia and the Fall of Singapore: ‘Inexcusable Betrayal’ or Calculated Risk”、”Churchill and Australia” Conference, Menzies Centre for Australian Studies, King’s College London, and Churchill Archives Centre (Cambridge, June 2002, unpublished) を参照。